

緒言

本書は、二〇一八年一月二十七日から二十八日の二日間にあつて東京藝術大学で開催された「日本画の所在」と題するシンポジウムから生まれた。「日本画の所在」というテーマを設定したのは、今日の日本画に関する素朴な疑問から発している。すなわち、日本画はどこから来たのだろうか。今、どこを生きているだろうか。そして、これからどこへ行くのだろうか、というものである。

西洋化の波の中で近代絵画としての日本画が誕生してからすでに一〇〇年以上が経った今、東アジアが世界的な焦点となりつつあるこの時代にあつて、日本画の来し方と行く末とを問い直す機会となることを願つて、このシンポジウムは開催された。

「日本画の所在」という大テーマについては、本書掲載の多くの論考がさまざまな角度から論じている通りである。ここでは、シンポジウムを振り返った感想を一言だけ申し述べておきたい。それは、〈日本画なる世界〉には誰がどのようなかたちで参加しているのだろうか、というすこし視点をかえた問題提起となるだろうか。文化人類学にはパーテイシパント・オブザーベーション（参与観察）という概念がある。異文化を研究するために、そこで行なわれる祭礼や行事などに参与して観察する調査方法のことだが、参加の方法、あり方は多様である。文化人類学者の岩田慶治氏は、次のような言葉で参加の問題点と核心とを突いている。

ドラマを見物するのも参加、俳優として自ら演ずるのも参加である。村人としてそこに住みこみ、そこに生きるのも参加、そこに死ぬのも参加である。それなら、死んだらどこに参加するのか。とにかく、参加という行為の中で、「個」と「全」とがお互いに映りあう。互いに他の象徴となる。

〔コスモスの探究 その本質と表現〕『アジアの宇宙観』講談社、一九八九年

これを日本画にむけて問い直せば、現在、日本画の世界には誰がどのように参加しているのか。日本人という村人か。そこに生きて日本画を描く人か。日本画を観る人か。日本画を研究している人か。日本画とともに死んでいこうとする人か。

参与的な観察などというからには、それが異文化であることを前提としているわけである。日本画は日本文化の中心でこそあれ、異文化ではあるまいとの反論があるかもしれない。しかし、私はそのように捉えること自体が大きな問題なのではないか、とこのシンポジウムを終えて強く感じたのである。日本画は様々な意味において異文化になりつつあるのではないか——。無論のこと、それはあくまでも個人的感想に過ぎないが。

本書はシンポジウムでの発表やコメントを掲載し、また新たな寄稿を加えて再編集したものである。基本的な構成と内容はシンポジウムのそれを踏襲しているので、シンポジウムでどのようなことが行われたのか、以下に開催趣旨と進行を合わせたかたちで全体像を記録しておく。

今日における「日本画の所在」を問うこのシンポジウムは、研究者がそれぞれの立場から問題を提起し、作家のコメントを重視しながら進行していく形式をとった。もつとも重要な課題のひとつは、これまでの日

本画をめぐる議論が近代における西洋化の問題に傾きがちだったのに対して、日本画を東アジア絵画の中に位置づけることであった。新たな視点から「日本画の所在」について検討していきたいと考えたのである。

第一日目。まず北澤憲昭から「東アジアのなかの日本画、日本画のなかの東アジア」と題する開催趣旨の説明があった。第Iセッション「歴史」では、東アジア史と近代日本史という時系列に照らして日本画を再確認し、幅広い視点から日本画の歴史を検証した。古田亮「近代の日本画 その展開と諸様式」と、チェルシー・フォックススウェル「NIHONGAとは何か？」のふたつの発表に対して、北澤を司会に塩谷純、佐藤道信がコメントレーターとして意見を述べた。その後、発表者を交えての討論があった。一日目の最後となる板倉聖哲によるレクチャー「東アジアへのまなざし——近代日本画成立以前」は、翌日のセッション「領域」への架橋的役割が期待された。

第二日午前。古田から改めて開催趣旨の説明をしたあとで、第IIセッション「領域」では、ふたつの発表、天野一夫「日本画」の主題と表現——アジアとの関係の中で」、荒井経「東アジア絵画の教育現場」があった。そして、野地耕一郎を司会に、齋藤典彦による一九八〇年代の東京藝術大学日本画科に関する説明を聞き、コメントを交えつつ発表者との討論を行った。このセッションでは、画題、教育、地域など様々な観点から日本画の領域を問い直し、東アジア絵画としての日本画の広がり方を探った。その後、三瀬夏之介によるレクチャー「東北画の可能性」を聞き、午前の部を終了した。

午後からは、第IIIセッション「表現」に進んだ。ここでは、筆墨という東アジアの伝統画材を中心に再考しつつ、現代の日本画がもつ多様な表現について論じた。野地の発表「現代の絵画と東アジア」を踏まえて、天野を司会に岡村桂三郎、間島秀徳、胡明哲が登壇して討論が行われた。

最後に以上の議論をふまえ、加藤弘子を司会に、これからの日本画を問うというテーマで集中討議を行った。会場からの熱のこもった質問や意見もあり「日本画」に対する関心の高さが実感された。こうして、二日間にわたる饗宴は閉幕した。

本シンポジウムの記録集の公開は当初からの主催者の希望であり、各発表者はそのことを前提として原稿を用意して発表に臨んだ。録音記録などをもとにいち早く何らかの報告書を作成することも想定していたのだが、この度の出版にあたっては、その場の記録ではなく、シンポジウムから一年以上を経た時期にこれを振り返り、執筆者の判断によつては各討論の内容を踏まえた意見を加えている。発表者以外では佐藤道信、塩谷純、齋藤典彦、岡村桂三郎、間島秀徳、胡明哲、加藤弘子、峯村敏明の各氏から充実した論者が寄せられた。単なる記録集を越えて、本書が日本画に関する諸問題を新たに問い直す契機となつたことを確信している。こうして、ここに浮かび上がる日本画に関するさまざまな角度からの議論が、一部の研究者や作家に特化した狭いものではないことは、シンポジウムにのべ四〇〇人近い聴衆が詰めかけた事実からも察せられるところである。この書籍化の試みが、シンポジウムへの参加者のみならず、本書の刊行によつて加わつた新たな参加者、特に若い世代を含む幅広い層の参加者に対して、何らかの刺激となることを願つてやまない。

なお、本書の刊行は公益財団法人 出光文化福祉財団からの出版助成なくしては実現できなかった。末筆ながら、記して心より感謝の意を表したい。

古田 亮

目次

口絵

緒言……………古田 亮 (1)

序論 東アジアのなかの日本画、日本画のなかの東アジア……………北澤憲昭 1

I 「歴史」

近代の日本画 その展開と諸様式……………古田 亮 27

『Nihonga』とは何か？——作品制作と展示の具体的観点から……………チエルシー・フォックスウエル 61
(渡邊美希訳)

いま「日本画」のソフトは何か……………佐藤道信 77

「描く」絵画から「塗る」絵画へ」再考……………塩谷 純 89

特論
東アジア絵画への眼差し——近代「日本画」成立以前……………板倉聖哲 105

II 「領域」

「日本画」の主題と表現——アジアとの関係の中で……………天野一夫 139

東アジアの近現代絵画——各国の現場レポートから……………荒井 経 165

東京藝術大学日本画の一九八〇年代をめぐって……………齋藤典彦 187

——教員、カリキュラム、入試の変遷から……………

東北画は可能か？ Is Tohoku painting possible? ……三瀬夏之介 203

特別寄稿

中国における「岩彩絵画」の現状……………胡 明哲 217

III 「表現」

現代「日本画」と東アジア——東洋絵画へのまなざし……………野地耕一郎 233

日本画考——創作と教育の現場から……………間島秀徳 251

特別寄稿

絵は、線であり、残骸であり、ゆるぎない。……………岡村桂三郎 261

特別寄稿

「日本画」ではなく「日本の絵画」の特質を考える……………峯村敏明 267

シンポジウム記録

集中討議「日本画の行方」概要

加藤弘子

278

あとがき

北澤憲昭

283

執筆者一覧

285

SAMPLE